第６５号

令和５年

５月１日

題 字
植 木　満
初代東進会会長

東進

発行所

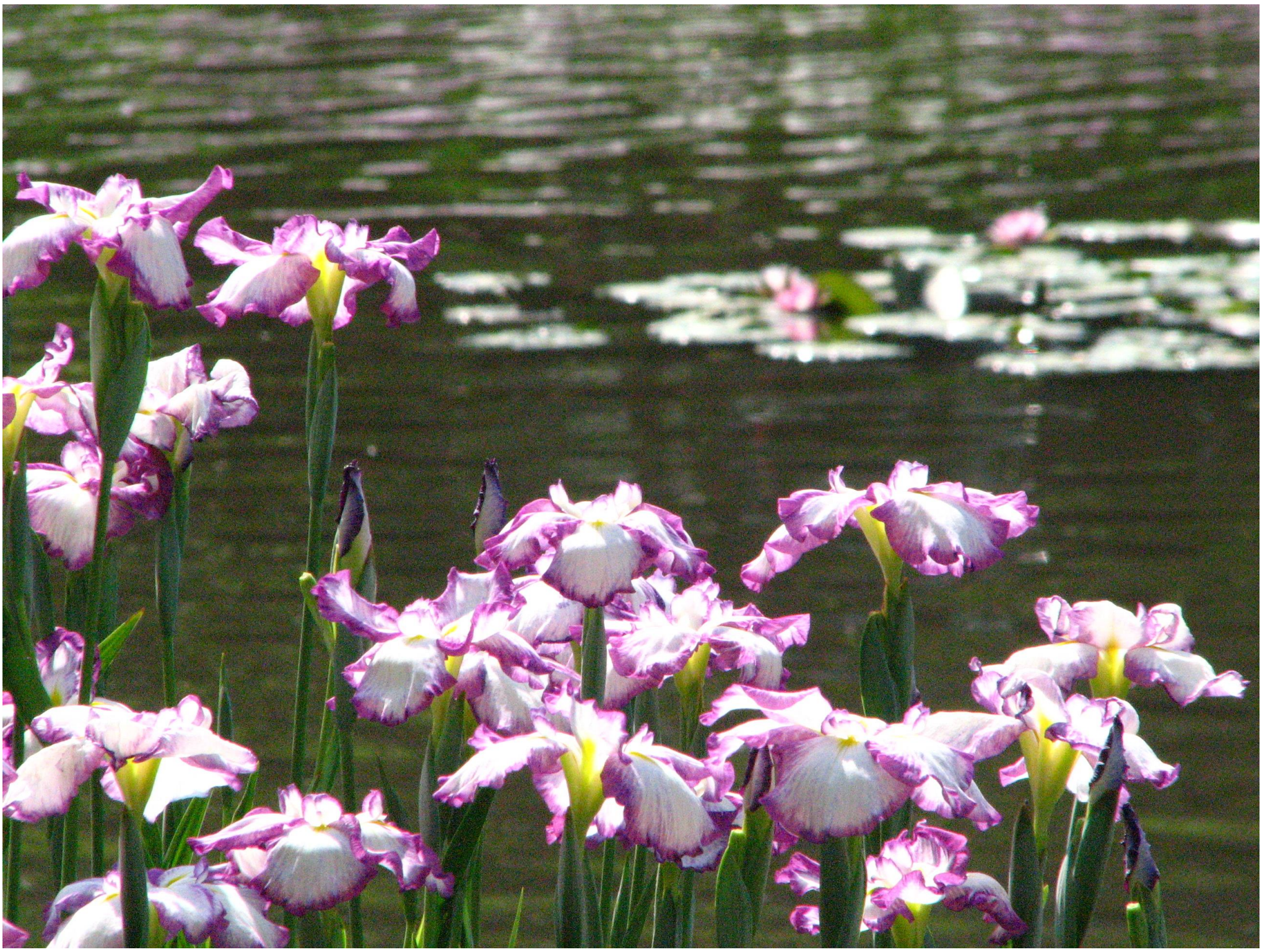
土浦一高東進会

（茨城県立土浦一高
進修同窓会東京支部）

発行人

東進会会長 飯塚　哲哉

事務局　〒102-0093　東京都千代田区平河町２－７－４　砂防会館別館６階
宮崎法律事務所　気付　東進会事務局
TEL（FAX）　０３－５４２１－５３２１
E－mail：toshinkaisecretary@gmail.com　　ホームページ　https://to-shin-kai.jimdo.com



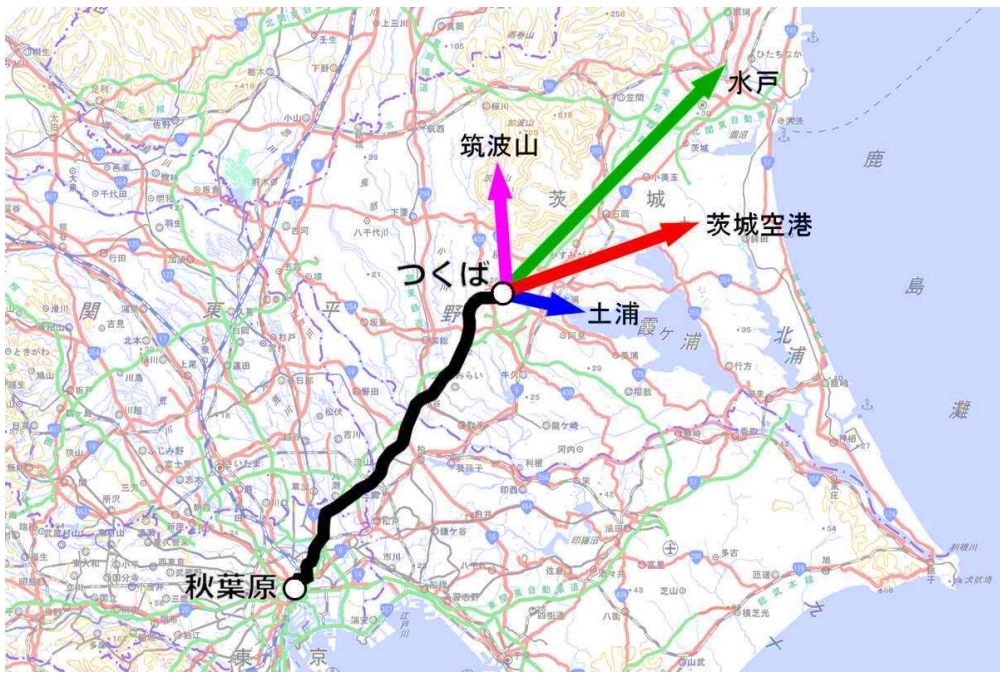
花菖蒲園（守谷市）　　提供　青木　功（フォトグラファー　昭和５０年卒）

■『つくばエクスプレス延伸論に想う』
塚本　一也（昭和５８年卒）
■２５回アカンサスクラブ講演録
『落語は時代に逆行するのか～縦社会、修行
コンプライアンス問題などなど～』
立川志のぽん（平成７年卒）
■第２６回アカンサスクラブ講演録
『つくばのまちづくりと私の関わり』
小林　遼平（平成１３年卒）
■第１５回リレー放談
『ネットメディア　「NEWS つくば」』
坂本　栄（昭和４０年卒）
■『「志のみ持参」
～私の経営及び教育理念～』
プラニク・ヨゲンドラ
土浦第一高等学校・附属中学校校
■令和５年度総会のお知らせ

「つくばエクスプレス延伸論に想う」

塚本一也（昭和58年卒）

高校35回生（昭和58年卒）の塚本一也と申します。私は元ＪＲ東日本の社員であり、鉄道建築の技術者として15年間勤務しました。在職中は首都圏の駅舎や駅ビル等の新築や改良工事に携わり、つくばエクスプレス（以下ＴＸ）が開通した２００５年当時はＪＲ八王子支社の建築グループリーダーという立場で、中央線沿線の自治体と協議しながら、駅を中心としたまちづくりに取り組んでおりました。２００６年にＪＲ東日本を退職し帰郷してからは、家業である大曽根タクシー㈱の経営者という地域の二次交通を担う事業者として、茨城県の交通問題について考えるようになりました。その知識や経験を基に、２０１４年10月に拙著「つくばエクスプレス最強のまちづくり」を発刊し、さらに茨城県議会議員在職中（H31.1～R4.12）においてもＴＸの県内延伸の必要性を訴え続けてまいりました。その甲斐あってか、令和４年度茨城県予算において、１８００万円の調査費が計上され、年度内に茨城県としての方針を決めるための作業が行われるようになりました。本稿では、これまでの私のＴＸ延伸に関する私見を総括して述べさせていただこうと思います。



ＴＸはそもそも昭和30年代に常磐線の混雑緩和対策として、バイパスルートを建設するという発想から始まりました。常磐線のバイパスとして計画されたにもかかわらず、つくば駅止まりである現状は当初の目的を果たしていないという事が言えます。

ＴＸの最大の利点は、①線形がほぼ直線であり、都心へ真っ直ぐ向かっているためスピードアップが図れる②ＡＬＬ高架で踏切が無く列車障害や人身事故が少ない③自動列車運転装置（ＡＴＯ）やホームドア等の最先端の技術を導入し安全性と経済性を両立させている、などがあげられます。それゆえに日々の安全・安定輸送が確保できるため、アカデミックな沿線開発の魅力度と相乗効果を発揮し、ＴＸ沿線は人気の住宅地として人口増加をもたらしているものと思われます。

しかしＴＸ開業後18年近くが経過し、設備の老朽化や故障による列車障害という事象が現れ始めました。

例えば、最近発生したＴＸのレール破断事故などにおいて、常磐線への振替輸送ではエリアが限定的であるため、茨城都民の帰宅の足に大きな影響を及ぼしてしまうという事象が発生いたしました。茨城県内においてはＴＸと常磐線は常総線経由での接続となるため、つくば市内のＴＸ利用者は行き場を失ってしまい、マヒ状態に陥ってしまいます。これを機にお互いの危機管理のために、北千住駅のような接続駅をつくば以北に設ける必要性の機運が、利用者も含めてさらに高まるのではないでしょうか。

今回の茨城県の方針決定においては、調査資料を基に第３者委員会が年度内に知事へ答申を示すことになっております。４方面の中でも土浦案が有力と言われておりますが、私も現実的な案として評価しております。（本執筆時は土浦案が未決定）

茨城空港や水戸方面と決定的に違うのは工事費であろうかと思われます。在来線の高架の鉄道は、概算ではありますが工事費として１億円／10ｍぐらいを見込む必要があります。ちなみに地下鉄のシールド工法の場合は、（現場の条件にもよりますが）その約１０倍である１億円／ｍぐらいを見込む必要があります。つくば駅～土浦駅を概ね10ｋｍとすると、約１００億円の工事費を想定しなければならず、土浦よりも遠方にある茨城空港や水戸は、その分工事費も割増しになってしまいます。

また、土浦方面へ延伸することの意義は、常磐線と接続し、計画当初の目的であるバイパス機能を持たせることによって、交通手段選択に幅を持たせることであります。必要最小限の投資によって、最大限の効果を発揮するためには、土浦方面への延伸は有効な案なのではないでしょうか。

では、仮に土浦方面への延伸が決定したとして、今後どのようにこのプロジェクトを進めればいいのでしょうか？鉄道の計画は国土交通省の運輸政策審議会（以下、運政審）の答申に盛り込まれなければ、その先へ進むことができません。まずは茨城県としての意思決定をした後に、ＴＸの出資母体である東京、千葉、埼玉の各自治体に延伸の必要性を理

解してもらうことが重要かと思われます。

ＴＸは現在、終点の秋葉原から東京延伸を予定しており、この計画は関係者の合意が得られています。一方で東京都は臨海部に「臨海地下鉄線」という都営地下鉄新線を計画しており、運政審の答申でも事業化が認められております。その地下鉄線の始発駅が東京であり、ＴＸとの接続を望んでいるようですが、乗り継ぎなのか相互乗り入れなのかは今後すり合わせが必要になってくるかと思われます。

東京駅以南で東京都が独自の計画を要望するのであれば、茨城県においてもつくば以北における独自のプランを要望しても不思議ではないはずです。むしろ、今回の運政審答申前に「茨城の想い」を告白しなければ、これから先このようなチャンスは２度と来ないと思われます。ＴＸ関連で東京都が提示する要望や条件に対して、「茨城県も協力しますが茨城県の要望も聞いてください」という状況を作り、茨城県が孤立しない施策の進め方をするべきでしょう。

また、整備新幹線計画を見てもそうですが、何よりも地元の熱意というものが重要かと思われます。現在、九州新幹線と北陸新幹線、北海道新幹線はそれぞれ延伸工事を施工中であり、その他にも四国新幹線の実現や山形新幹線のフル規格化などが各地域の経済団体によって要望されております。四国新幹線が現実化すると、全国で新幹線が通っていないのは半島である千葉県と島である沖縄県を除けば内陸では茨城県だけになってしまいます。準新幹線ともいうべき機能を備えたＴＸは、これからの茨城県の発展にとってまさに生命線であり、重要な交通インフラであると思われます。特に「つくばエクスプレス」の名前の通り、つくばが中心となって両翼に延び行く姿を茨城県の将来ヴィジョンとして示すべきではないでしょうか。

国土交通省がコンパクトシティという事を謳い始めて久しくなっております。交通とまちづくりが一体となった施策であり、都市機能を集約し移動に負担をかけずに日常生活が完結できるようなまちをつくり、一方で基幹交通によって都市間輸送を担い都市機能を相互補完することによって経済活動を維持していくような国土を形成していくことが目的であります。

これまで茨城県は県内各地域に人口が分散している都市構造でありましたが、今後どのように再構築していくかのカギを握っているのが鉄道であろうかと思われます。これまでは茨城県民の多くが移動手段を自家用車に頼っておりましたが、高齢化や燃料費の高騰などによって、公共交通を利用せざるを得ない状況になってきています。しかし、地域での公共交通の主役であった路線バスの多くが廃線となり、生産年齢人口の減少によって益々縮小を余儀なくされております。地域では路線バスの代替えとしてタクシーに公共交通の役割を求めておりますが、そもそもが贅沢品であり運転手一人に対して平均で１・５人程度の輸送人員では生産性は必ずしも上がりません。

これからのまちづくりは高速鉄道によって都市間輸送を円滑にし、鉄道沿線に人口を貼りつけなければなりません。また各駅には駅を中心として都市機能を充実させ、日常生活の利便性向上を図ることも重要です。さらに住み替えに対する支援を厚くし、人口の高密度化・高集約化を促進し、交通などの生活インフラサービスには、規制緩和によって機械化や自動化を導入して効率性を高めることが必要です。ＴＸ延伸を実現することによって、昔、映画で見たような近未来のまちづくりが始まることでしょう

第25回アカンサスクラブ講演録
「落語は時代を逆行するのか？
～縦社会、修行、コンプライアンス問題などなど～」
立川志のぽん（平成７年卒）
令和４年12月１日実施

【略　歴】
２００２年　筑波大学大学院芸術研究科修了
２００２年　一般企業に就職
２００４年　退職
２００５年１月　立川志の輔に入門
２０１３年４月　二ツ目昇進

●落語家をしております立川志のぽん（広瀬敦）です。今回の講演では、前半に、男女・年齢に限らずフラットな地位や生き方を求められる現代社会において、階級制度や前座修行の存在する落語界は時代に逆行しているのか？ということに、当事者の視点で語りました。

結論から申し上げると、経験者としては必要だと思っています。

東京の落語界には、見習い→前座→二ツ目→真打といった順に階級制度がございます。階級制度というと否定的な印象がありますが、一方でメリットもあります。

階級があることで下の身分のものは守られます。寄席興行は身分の低いものから順番に出演するのが基本です。その興行がうまく盛り上がらなかった場合、責任の所在は最後に出演するトリにあります。それから前座の芸とトリの芸ではお客様の笑い声、満足度も大きく違います。前座だからしかたがないと技量がともなわなくても許されます。そこに甘えてばかりはいられないのですが、低い身分なので守られます。

前座修行の中で一番重要なのが、その場の状況の円滑化、好転化のためのアンテナづくりだと思います。落語は舞台上の出演者が一人です。これは階級に関わらずの一人です。どんな階級であっても一人で会場の「場を制する」ことしなければならず、その場が盛り上がるかどうかはその一人に責任がかかってきます。今日の客層はどんなことでよく笑うのか、その場で判断して演目を選び満足させないといけません。またトラブルが起きた場合に誰も傷つけずにその場を丸く収めることも大事です。その状況判断のアンテナを磨くのが前座修行なんだと思います。

「白いものを黒い」「自分に非がなくても謝る」など理不尽に耐えることも強いられますが、アンテナを磨くためには必要なことだと思います。

落語の中に出てくる登場人物は失敗ばかり。失敗して当たり前の世界なので、失敗に対して寛容です。先輩方も同じような失敗をしてきた方々ですので、いざという時には並んで一緒に謝ってくれます。とても素敵な世界だと思います。

●後半は一席落語を実演し、そこから話を広げていきました。落語は世相を映す鏡であると思うのですが、現在の世相を鑑みて、伝わっている古典そのままの形ではやりにくくなった噺があります。落語におけるコンプライアンスの意識について、古典落語の前座噺「子ほめ」を例に考えてみましょう。この噺は落語会で頻繁に演じられる噺で、前座噺というだけあって、落語会の最初に演じることで客席を笑いやすい雰囲気に変え、場をあたためる役割を持っています。

簡単なあらすじは以下のようなものです。

「世辞愛嬌を知らぬ八五郎、人を褒めておだててお酒をご馳走になる方法を隠居さんから教わりますが、中々教わった通りに上手くできず失敗だらけ。」という内容です。この中で隠居さんから教わる具体的な褒め言葉として、

「しばらくお見えになりませんでしたが、どちらへ？ほう、商いで南の方へ？道理でお顔がお黒くなりました。ですけどご安心なさい。アナタなぞは元がお白いんですから故郷の水で洗えば元通り、白くなるじゃございませんか。黒くなった分だけ儲かったんじゃございませんか。」

というセリフがあります。

隠居さんが褒める基準においているのが、肌の色が黒く日に焼けたことを表で商売熱心に働いた証とし褒めたたえ、またその一方で、色白であることを色黒よりも良いものとして、賞賛の対象にしています。単一民族が多くを占めていた江戸文化の中でできあがったお世辞であるためしかたないことなのかもしれません。

しかし、人種など多様化した現代においては、見た目に評価の基準を置いたルッキズムや、肌の色や個人のルーツに関わる差別につながるとも限らない表現は、演じる側としても「このシーンは笑ってもらえるのか？」と疑問がでてきます。

また隠居さんから別の褒め方として教わるのは、

「失礼ですがあなたのお歳はおいくつですか？四十五？？ほう、四十五とはたいそうお若く見える。どう見ても厄そこそこでございましょう。」

これが褒め言葉になるという隠居さん言い分として『人間二つ三つ若く見られるのは気分がいいものだよ』と言っています。

人生百年時代ともいうべき時代に、「年齢が若いこと」に重きを置いたお世辞・褒め言葉が本当に褒め言葉として機能しているのかにも疑問です。

他にも改善のすべきシーン、演目があるのですが、紙面の都合上割愛させていただきます。

生の公演に限らず、動画などでも構いません。これを機会に色々な落語に触れていただき、是非とも皆さまのご意見・ご感想を直接伺いたいなと思います。次は落語会の会場でお会い致しましょう。

第26回アカンサスクラブ講演録
「つくばのまちづくりと私の関わり」
小林　遼平（平成13年卒）
令和5年3月11日実施

はじめに

この度、講演の機会を頂きました平成13年卒の小林遼平と申します。私は現在、つくばまちなかデザイン㈱でつくばのまちづくりに携わっているところですが、高校在学中は将来都内で働きたいと茨城からの脱出

を考えていました。今回の講演では、そんな私が茨城から出ずにつくばのまちづくりに携わったきっかけや現在取り組んでいることなどについて紹介させて頂きました。

自己紹介

私とつくばの縁は、幼稚園の時に父の仕事の関係でつくば駅近くに引っ越してきたことが始まりです。当時はつくば駅がなかったこともあり、中学生の頃まではつくばより土浦のほうがにぎわっており、映画を見に行くのもバスで土浦まで揺られて行った記憶が今でも残っています。

私が土浦一高に入学した動機ですが、他の方と少し異なっており、中学生の時、学校見学で土浦一高に行ったときに旧本館の正面玄関前にある桜を見て、非常に感激し、この桜を見たいと強く思ったことがきっかけでした。

話しを戻すと、私は当時からよく都内に遊びに行っており、早く田舎の茨城から脱出したいと強く思っていました。その思いから大学は茨城を脱出し、都内にはたどり着けず千葉県の大学の土木工学科で都市計画を学びました。

ここで私の人生に大きな転機が訪れました。大学で都市計画を学ぶにつれ、つくばの街が好きになり、つくばのまちづくりに携わりたいと思うようになりました。その結果、つくば市役所に就職をし、10年程度つくばのまちづくりに携わり、後述しますが、２０２１年のつくばまちなかデザイン㈱の設立に合わせ転籍し、行政とは別の角度でつくばのまちづくりに携わっています。

つくばの街の好きなところと課題

私がつくばの街で好きになったところを紹介したいと思います。また、一方で課題も多々感じているので合わせて私が感じている課題も紹介します。

好きなところ

ベスト３　まちなかでも緑が豊か

ベスト２　面白い・頑張っている人が多い

ベスト１　ペデストリアンデッキと公園のポテンシャル

つくばの魅力は計画的に作ってきたので、他にはない街並みがたくさんあることだと感じています。これらを活かしたまちづくりを進めることが重要だと思っています。

ワースト３　こども増による学校不足や急激なインフラ整備

ワースト２　小さな面白い店が少ない

ワースト１　将来急激に高齢化

一方、課題も多くあり、一番の問題は急激な同世代の人口増による将来の高齢化だと思っており、今後の急激な変化に今から備えていくことが重要だと感じています。

つくば市で取り組んできたこと

私が最初に勤めていたつくば市役所では、つくば駅周辺のまちづくりに携わっており、つくば駅周辺を盛り上げたいと様々な取組みを行ってきました。ここでは文字数の関係もありますので詳細は省略しますが、日本で初めて無電柱化を義務化したつくば市無電柱化条例の制定や国家公務員宿舎の大量の廃止計画に対応した街並み誘導、パブリックスペースを地域の方と一緒に活用しにぎわいを創出するつくばペデカフェプロジェクト、マンション開発と公園との一体的なリニューアルなど様々な取組みを行ってきました。

つくばまちなかデザインとは

市役所では地域の方と連携して様々な取組みを行ってきましたが、つくば駅周辺のまちづくりに更に取り組んでいくためには、「人と人、コトとコトをつなげる調整機能」と「まちなかでコトを創る実行する機能」の２つの機能を担うまちづくり組織が必要であると認識し、２０２１年４月につくばまちなかデザイン㈱をつくば市が中心となり設立しました。

つくばまちなかデザインでは、街に必要な様々な事業を手掛けています。主な取組みとしては、つくばセンタービルにコワーキングスペースやカフェ等を中心とした様々な人のチャレンジを応援する拠点「co-en」の運営やイベントの支援、つくばエキスポセンターのカフェの運営、魅力あるマンション開発を進めるためのコンサルティング、お店から自宅までロボットで商品を自動で配送するロボット配送の運営、まちなかの情報発信などを行っています。今後もつくばのまちなかがわくわくであふれるようになるよう取り組んでいきます。

最後に

コロナや人口減少、少子高齢化など社会情勢は大きく変化しており、街の価値や役割についても大きく変わってきていると感じています。街はコロナ前については物を買ったり食事をしたりする場でしたが、コロナの影響により街で物を買うのではなくインターネットで買うことが中心となっています。そのような中でこれからの街の価値や役割は、そこにしかない体験など、その街にいかないとできない体験をする場になると感じています。

私としては、まだ未熟ではありますが、引き続きつくば駅周辺で様々な体験を創り出すことによって、わくわくがあふれる街を創っていきたいと考えています。

今回の講演会では多くの方に的確なご意見を頂き、私の取組を振り返る良い機会となりました。せっかくこのような機会を頂きましたので、講演会に参加していない方もお気軽にご意見等をお寄せいただければと思います。

第15回リレー放談
ネットメディア「ＮＥＷＳつくば」
坂本　栄（昭和40年卒）

私は現在、ネットメディア「ＮＥＷＳつくば」を主宰しています。旧常陽新聞の記者が中心になって、２０１７年10月に立ち上げてから5年半。当初のページビューは月数万でしたが、今では50万～１００万に増え、つくば・土浦エリアのニュースを伝える媒体になりました。地域の出来事に関心がある方はネットで検索してみてください。

このメディアの特徴は特定非営利活動法人（ＮＰＯ）であることです。新聞もＴＶも営利組織ですから、珍しいメディア運営形態です。旧常陽の記者たちが、読者が減少する新聞に代わり、地域ニュースを伝えられるメディアは何かを研究。運営費を地域の有志（意識の高い個人や地域メディアが必要と思う法人）の寄付に頼る形で行こうと立ち上げました。

ジャーナリストと市民を結ぶ情報誌・月刊「マスコミ市民」には、「廃刊した地域紙から誕生したニュースサイト」とのタイトルで、「ＮＥＷＳつくばは、従来の地域紙に代わって地元自治体からの支援を受けずに自治体行政の監視を目的に行政関係のニュース取材を行うニュースサイトとして運営されており、これは地域のネットメディアとして極めて貴重な存在である」と紹介されました。

いろいろな記者とコラムニスト

私たちのサイトの特徴は記者の顔ぶれです。記事のチェックは常陽にいた記者が担当。取材陣は、大学教授、大学生、一般市民、他メディアにも寄稿するフリー記者、一般紙や専門紙を退職したベテラン記者で構成されています。地域に住まう記者経験者の参加は大歓迎です。

もう一つの特徴はコラムが多いことです。現・元大学教授、現・元自治体関係者、弁護士・エコノミスト・精神カウンセラー、写真家・画家・イラストレーター、作家・脚本家・随筆家・言語研究者、障害者支援や自然環境の活動家、文明批評家など、20数人のコラム寄稿者が登録されています。

こういった方々はＳＮＳでも自分の意見などを発信できます。しかし、個人サイトの場合、訪れる読者数に限界があります。その点、私たちのサイトを基地にすれば、発信力は格段に強まります。「ＮＥＷＳつくば」はインフルエンサー（ネット上で影響力がある人）が集う場でもあります。一家言あるコラム執筆者も大歓迎です。

私たちは自前のサイトだけでなく、「Google ニュース」や「Yahoo!ニュース」などのプラットフォーム経由でも記事を出しています。地域のあれこれを多くの人に読んでもらいたいと思っているからです。輸送や配布の制約から伝達エリアが限られる新聞メディアに比べると、こういった物理的な制約がないネットメディアは可能性に満ちています。

ニュースの卸売業から小売業へ

私は33年間、通信社で仕事をしていました。大蔵省、外務省、日本銀行、自動車業界、エネルギー業界などを担当。経済部長のときは、金融電子メディア・ＭＡＩＮ（専用回線を使った金融情報端末）の編集モデルを作り、証券電子メディア・ＰＲＩＭＥ（同証券情報端末）をリリースしました。メディア事業本部の責任者の時は、ニュースサイト・時事ドットコムを立ち上げました。

通信社というのは、新聞やテレビなどのマスメディアのほか、銀行、証券、官庁などの非メディアにも各種情報を提供する「ニュースの卸売業」です。当然、メディアの読者との関係は間接的になり、配信記事への反応や評価を直接知ることはできません。

こういったモヤモヤを抱えていたとき、土浦市真鍋本社の「常陽新聞」から社長をやってくれないかと打診を受け、「ニュースの小売業も面白そうだ」と引き受けました。この転進について新聞業界紙などから取材を受けましたが、「ホールセールに飽きたので、リテイルに移ることにした」と答えました。

通信社幹部として、読者が減少する新聞業界の苦境は知っていましたので、常陽のビジネスモデルを「フリーペーパー（無料紙）で常陽新聞（有料紙）の赤字を埋め、日刊紙を維持しながら、経営全体を回す」と定めました。ところが、この体制が整ったところでリーマンショックにぶつかり、フリーペーパーの広告が数年にわたり激減。このモデルの維持が難しくなり、常陽は廃刊に至りました。

新しいメディアのモデルづくり

通信社時代の電子メディアとネットメディア⬇新聞社時代のフリーペーパー⬇ＮＰＯ形態によるネットメディア。この50年の間、いろいろなメディア（伝達手段）とメディア経営に付き合ってきました。今言えるのは、有料紙でニュースを伝える時代、有料紙・無料紙を広告掲載の場とする時代は終わり、いずれもネットが主流になったということです。

ノンプロフィット＋ローカル＋ネットの「ＮＥＷＳつくば」モデルが全国に広がり、衰退する新聞に代わって、地域メディアの新しい形にな

ればと思っています。通信テクノロジーの進化により、ニュースはスマホで読み見るという面白い時代になりました。

次回は昭和56年卒の酒井学雄さんにバトンタッチします。

【略歴】１９７０年一橋大社会学部卒、時事通信入社。ワシントン特派員、経済部長、解説委員などを経て、２００３年退社。同年から10年間、旧常陽新聞新社社長・会長。現在、ＮＰＯ法人ＮＥＷＳつくば理事長

「志のみ持参」
～私の経営及び教育理念～

プラニク・ヨゲンドラ
土浦第一高等学校・附属中学校校長

ナマステ！

２０２３年４月１日から皆様の母校である茨城県立土浦第一高等学校・附属中学校の校長に就任しましたよぎ（プラニク・ヨゲンドラ）と申します。これから３年間に及び本校の校長として頑張る覚悟ですので、何卒よろしくお願いします。特に部活動や課外活動などにおいて同窓会の皆様には様々な形で協力頂いておりますこと、大変心強く感じております。

本校の卒業生は国内外において様々な分野で活躍され、気付かなくても本校に来る以前より、多数の一高卒業生とのご縁がありました。この一年間、行く先々で、一高の卒業生に出会う場面が多く、本当に驚いています。そして、皆様から「よぎさん、一高をよろしくお願いします」と言われると、私も一高の一員になったことにプライドを感じます。このプライドを持って、常に一高のために邁進する所存でございます。

私は時に教育について悩むことがあります。教育のあるべき姿とは何か。または、教授法のあるべき姿とは何かと。深く考えても定かな答えは見つかりません。私が経験した国々の教育はそれぞれ違うもので、成果もそれぞれ違うものです。高校で学ぶ教科が多いか少ないか、授業の進め方が受動的か能動的か、生徒の成長ベクトルに大きな違いが見られます。

戦前のアジアの国々ではスペシャリストを育てる専門教育が盛んだったようですが、戦後は政治や人口爆発など様々な理由でゼネラリストを育てる一般教育が根強いてきました。そして今や、生徒の多様性を認め、一人ひとりにあった教育を提供するとまで言われるようになりました。少し前までは、言われたことをしっかりやってくれる人材が多く求められましたが、近年は、自分で考え、主体的に動く人材の育成が要求されています。

しかし、限られている人材、予算やインフラの中で、そこまでの余地はありません。既に教職員は残業に追われ、生徒は勉強、部活動、その他及び試験で忙しく過ごしています。立ち止まる余裕すらない感じがします。他方、今の学校カリキュラムのまま将来は職に就くのも大変になるとまで言われています。よって、本校においても自己分析や自己理解、総合的な人格形成、多言語能力や情報技術などの教育を進めなければなりません。ではどうするか、ということをこれから生徒、教職員、保護者、卒業生や教育関係者のみなさんの意見を伺い、それに基づいて次世代に向けて「チェンジ」を施していきたいと思います。

本校はご存じのように１２５年以上の歴史を持つ県下屈指の伝統校です。常に教育内容を研究し、生徒の飛躍を支援して来ました。その結果、本校は今まで高い進学実績及び部活動における成果を収めて来ています。また、本校は課外学習、探究学習にも力を入れて来ています。本校での教育については既に様々な調味料が揃っていますが、そこにまた一味を足すのは私の役目ではないかと考えています。私の多国での教育及び就職の経験を活かし、グローバルな観点からその一味のスパイスをこれから吟味していきます。

私は「志のみ持参」という言葉を経営及び教育理念に掲げています。志とは、ある方向を目指す強い気持ち、または相手のためを思う厚意という意味があります。本校の全生徒にこの言葉を胸に刻んで欲しいと思いますし、教職員も真心をもって、生徒の成長を支援したいと思っています。

本校の校訓は、「自主・協同・責任」であります。そこに「肯定感・思いやり・国際性」の概念を加え、自己肯定感を持ち自主的に行動し、思いやりを持ち協同し、多様な考え、国際的な視野を持って、皆さんに頑張って欲しいと思います。常にポジティブでいることは自分が選ぶことです。何があっても冷静に対応し、笑顔でいること、自分を愛し、周りの人びとを思いやる心を持つよう生徒の支援を行ってまいります。周りの人達から尊敬され、自ら誇りをもって生きることのできる「人間一流」の人を育てることが私どもの願いであります。

本校には授業・部活・行事の３つ

を大切にする「一高スタイル」があります。学びや活動のペースは速く、生徒には志を持って、積極的に全てのことに取り組んで欲しいと思います。特に高校の3年間は学生生活の中で一番濃厚で、一番大切な期間だと思っています。この期間中により多くを学び、よりたくさん汗を流し、充実した学生生活をおくってもらいたいと思っています。自分の長所短所をしっかりと理解し、短所を乗り越え、様々なことに取り組むことを望んでいます。

私が校長に就任したことで、学校関係者の皆様の中には期待及び不安の両方があろうかと思います。私は、人間や人間社会、教育や技術的な発展のエンドゴールは「幸せ」であると思っています。社会構造が複雑化し、サバイバルの難度が上がっていく世の中です。次世代に求められるものが常に高度化しています。そのような変化に対応できるよう「インテリジェンスを育てる楽しい学校」を目指して、「不易流行」の考え方で本校の更なる発展に努めたいと思います。東進会の皆様からのご理解とご協力、ご支援のほどよろしくお願い致します。

令和5年度　総会・懇親会のお知らせ

（総会から講演までハイブリッド開催）

・日　時：　令和５年６月１１日（日曜日）
　12:30　受付開始
　13:00　総会
　13:20　母校吹奏楽部による演奏
　　および母校応援指導部による演舞（動画にて放映）
　13:40　講演
　　『好奇心が駆動するサイエンスを未来の技術につなぐ
　　～光格子時計の社会実装へ～』
　　香取　秀俊（昭和５８年卒　東京大学大学院教授）
　14:50　懇親会
　16:30　閉　会

・場　所：　学士会館　210号室
　千代田区神田錦町３－２８　　０３（３２９２）５９３６

・会　費：　東進会年会費3,000円　【同封の振込用紙をご利用ください】
　懇親会費7,000円

・司　会：　伊丹　牧子（平成7年卒）

・当番幹事：

【編集後記】

新型コロナウイルスの感染拡大から丸3年経ちました。その間、東進会総会はオンラインでの開催を余儀なくされましたが、今年度はやっとオンラインと対面のハイブリット方式で開催できることになりました。

マスク着用での生活に慣れてしまい、素顔をさらすのは少し恥ずかしく、怖い気持ちもあります。マスク着用での初対面の人の顔は、頭の中で自分の都合の良いように想像しているのか、マスクを外した顔が、想像していた顔と違っていた経験はありませんか。大人の私でもそうですので、成長期の幼児がマスク越しで人の顔を認識できているのだろうかと心配です。人の表情を読み取る力は育っているのでしょうか。

家族や友人と会食できるのは大変うれしく思いますが、コロナウイルスが絶滅したわけではないので、細心の注意を払って生活していきたいと思っています。皆様のお元気な姿を総会で拝見できるのを楽しみにしております。（H）